

ニコラウスさんは運転士

米澤 敦子

温かいホットワインをニコラウスさんはわたし達にふるまってくれました。九つのマグカップからは湯気と一緒に甘い香りがただよっています。サクサクした焼きたてのアップルパイもいただき、心も体もトロトロしてきました。今年の仕事をやり終えた満足感もあるのでしょうか。暖炉の火がパチパチ音をたてながら燃えています。窓の外には綺麗なお月様が浮かび、数えきれないほどのお星さまがプラチナ色に光っていました。

ニコラウスさんがこの日にだけ着る青い服に着替えて、「さあ、みんな。そろそろ出発するよ」と、わたし達に声をかけました。みんな何も持たず、何もつけず、ウキウキしながらニコラウスさんに続いて外に出ます。

扉を開けると古い蒸気機関車が停車していました。体長が2メートルほどあるわたし達のため、とても大きな機関車なのですが、いつの間に到着したのか、毎年玄関先でそっと待っていてくれるのです。

乗客はわたし達だけなので、客車は一両だけなのですがとても広く、キルトのかかったソファもあればお茶やパウンドケーキのつたテーブルもあります。大きな車窓からは、雪におおわれた野原が月明かりに照らされて白く輝いていました。

「今年も無事に子ども達にプレゼントを贈ることができたよ。みんなのおかげだね。本当にありがとう。さあ、今日はみんながお客様だ。ゆっくり機関車の旅を楽しんでおくれ」

そう言ってサンタのニコラウスさんは、機関室に入って行きました。毎年十二月三十一日の夜は、わたし達トナカイ九頭を客車に乗せると、ニコラウスさんは石炭を燃やし、運転士さんになって機関車を発車させます。

「クリスマススイブにソリをひいて世界中をめぐるってくれたせめてものお礼だよ」と言って、赤い洋服から青い運転士さんの洋服に着替え、星でできたレールの上を安全運転で北極星まで連れて行ってくれるのです。

ボツボツと汽笛が鳴って機関車が動き出しました。ハラハラと雪が舞っています。トナカイのリーダーのルドルフはみんなにホットチョコレートとビスケットを配ってくれました。わたし達はただ窓の外を眺めて、微笑みあいます。深夜には冴えわたった蒼い空にドーンと、大きな花火が打ち上げられました。花火は天空を照らし、次には何万もの光の糸となってスルスルスルと流れ落ちます。続いて絶え間なく色とりどりの花火がきらめき、その中を機関車は泳ぐように走り続けました。フィンランドでは新年にかけて花火を打ち上げるのです。わたし達を夢心地にさせて火の粉と雪と光の中、北極星までのびたレールの上を機関車はグングン進みます。北極星に到着しますと、神様が新年の祝福を授けて下さることでしょう。安心の機関車の旅は、幸せでばかりでうっとりしてしまいます。ルドルフは入れたてのホットチョコレートとビスケットを機関室に持って行きました。